

「助かるはずの命」 学習塾に芽生えた防災意識

「息子は逃げたくても逃げられなかった」。宮城県大崎市の田村孝行(61)と妻弘美(59)は2020年9月、全国の塾講師約160人を前にオンラインで語り始めた。テーマは企業の防災のあり方。長男の健太(当時25)が津波に襲われたのが勤務中だったからだ。

全国で約170の学習塾を展開する「スタディーネットワーク」(山梨県)の研修。企業トップから講師を求められたのは、この日が初めてだった。

きっかけは2013年5月、宮城県女川町での出会いにさかのぼる。

同社の塾講師、沖村政裕(42)



オンラインで全国の塾講師に防災を訴えた田村孝行さん(上段の右から2人目)と弘美さん(同3人目) 〓
スタディーネットワーク提供

は家族と旅行中、女川町を旅行していた親戚から「リアルな語り部をしている人たちがいたよ」と聞いて町を訪れた。人だかりの中心にいたのが田村夫妻だった。

夫妻は健太が勤めていた七十七銀行女川支店の跡地で、長男を失ったやるせなさを語っていた。徒歩3分の高台を指し、「助かるはずの命だった」と。

話を聞き終えると、沖村はその場で社長の小沢和充(43)にメールを送った。「うちも防災に取り組まないと。これから海の近くの教室もできるけど、対策はまだですよね」

山梨県で暮らす小沢にとって

震災は遠くの出来事だった。「大事な指摘をしてもらった」。16年、大地震に備えた防災マニュアルを初めて作った。

その後、教室は全国に増えた。津波や洪水など災害の種類や場所によって必要な備えは異なる。そこで全国の講師を対象にした研修に夫妻を招き、心構えを見直そうと考えた。

「日々の仕事に追われ、防災は後回しになってしまおう。でも、それではだめだと気づかせてくれる」と小沢は言う。

研修後に防災マニュアルを改訂し、毎年9月には防災週間も設けた。どんなに忙しくても、全教室で避難経路の確保や懐中電灯の配備、本棚の転倒防止策などを点検しているという。

(福岡龍一郎)